

めんたるねっと

VOL. 13-3

No. 51

子どもたちの今	スクールソーシャルワーカー考／学校・家庭・地域に働きかける活動	2
就労の現場から	入カチームの活躍紹介／株式会社ジューテックの雇用事例	4
被災地より	日々の支援の中で／東日本大震災から7年目に向けて～	6
YMSNの活動	トライ・ジョブコーチ／「勉強会」グループご紹介	7
	中高生の放課後支援 Irodori／新メンバーを募集中	8
	かながわプレジョブスクール／横浜・上大岡2校レポート	9
	予定・報告	10



スクールソーシャルワーカー 一考

～学校・家庭・地域に働きかける活動～

上大岡メンタルクリニック ソーシャルワーカー 宮崎 全代

神奈川県教育委員会（県教委）スクールソーシャルワーカーとして活動を始め、まもなく6年になります。最近、どんな仕事？ と尋ねられることが少なくなりました。県教委では、ホームページ（HP）「SSWガイドライン」に職務を明記しています。一方でわれわれ現任者たちは、実践的研究者による「SSWスタンダード日本版」に期待しています。個人的には、学校に対する説明の糸口に、「スクールソーシャルワーカー（SSW）とは、学校だけでは対応困難な児童生徒の問題を解決するため、子どもの安心と安全を最優先に考えながら、福祉的リソースを用いて、学校・家庭・地域に働きかける活動」と説明しています。常にチャイルドファーストで切れ目のない機関連携が自分のテーマです。つまり、スクールソーシャルワーカーは「子どもの環境を連携によって調整する人」とイメージしていただければ幸いです。そして幸いなことに、アセスメントや機関連携において、精神科領域における日々の業務経験が大変役立っています。

2008年4月、文部科学省が「スクールソーシャルワーカー活用事業」の開始を各自治体に通達しました。県教育委員会は、翌09年から本格的にスクールソーシャルワーカー（以下SSWer）の活用を始め、当初の4名から現在23名となり、県下4カ所の教育事務所に配置されております。また、2015年度から県立高校にも20名が拠点校に配置され、その他市採用のSSWerもおります。このハイスピードの増員の背景には、県下の市町において児童生徒が犠牲となる事件が相次ぎ、そのたびに学校や支援機関相互の連携のまずさと、SSWerの適切な支援介入が事件の未然防止に有効であったとの検証や見解が影響しているものと思われます。

本来、SSWerはメゾレベルの機能として、縦横にわたる機関連携の効果的なあり方や支援の流れを作り出す役割があります。その役割をうまく活用しないと、介入しないまま卒業ということもありうるのです。「存在は知っていたけれど何もできなかった」という事態を回避するため、情報共有と報告でだけで終わるケース会議には「てこ入れ」が必要です。

昨年11月に発覚した、東京電力福島第1原発事故で福島県から横浜市に自主避難してきた小学生（現中学生）のいじめ事件では、市教委が、「学校も教委もSSWerに支援要請をせず、校内で問題を抱えていた」と発表しました。さらに今後、SSWerに協力を求めなかった原因も内部調査で調べ、SSWerが円滑に介入できる支援体制を構築するべく支援方針をまとめることにしたそうです（1月21日NHK）。この事件の報道のあり方は子どもの権利視点で、疑問が残りますがここでは控えます。

そもそも、世間がソーシャルワーカーという職業に馴染みがない上に学校の多忙も影響していたと推察しますが、横浜市SSWerの機能が学校現場に浸透してないことが露呈された感があります。教職員の研修では、SSWの視点を教示しながら、各自治体でSSWerの採用基準が異なり、警察官や校長の再雇用先としてSSWerを採用している県外市町もあります。また、活動形態も異なり、特に横浜市は児童生徒保護者を対象にしたミクロレベルの直接支援が活用ガイドラインにないため、SSWerの葛藤がうかがえます。先の事件を契機に、今後、横浜市SSWerの業務指針が再検討される機会になることを願っています。

SSW活動の対象となるキーワードを挙げると今の学校の問題が見えてきます。「居所不明」「貧困」「長

期欠席」は、残念なことに小中学校では珍しくない事案です。よく先生方が「家庭が見えない」と言いますが、個人情報を守るため学校が把握している家庭状況は過度に少なく、支援機関との連携で少しずつ家庭環境が見えてきます。学校が訪問を強化しても姿の見えない不登校の児童や生徒については、児童相談所・子ども家庭支援行政担当と役割を明確にして「現認」（子どもを直接見て安全を確認すること）できるまで家族に働きかけます。例えば、登校意欲を失い、ゴミ屋敷の片隅で寝転んでなかなか姿を見せない子どもの「教育を受ける権利」を擁護し、何らかの事情でほとんど家庭に居ない親が「教育を受けさせる義務」を履行するために現実的な支援とは何か… ケース会議で話し合っていると、主任児童委員さんの朝の訪問が登校に結びつくこともあります。また、生活保護ワーカーが生活困窮家庭の子どもに勉強を教える活動を役所内で始めたり、いつの間にか「子ども食堂」ができていたり、何気ない大人の見守りが支援介入の契機となったりします。

2012年、文科省の調べで、通常級の6.5%の児童生徒に発達障害の可能性があると分かりました。「不登校と発達障害」の関係も研究されています。発達障害圏の子どもの場合、家庭でも学校でも居場所を得られず不安定な状態に陥っていくケースが目立つようになりました。校内では、特性を理解した上での指導が強調されますが、授業が成り立たないストレスによって担任が心理的に追い込まれる事案は思いのほか多いと思います。そこには教師間の不調が介在する場合もあり、子どもの安心のために職場環境も調整しなければと意気込むのですが、現実には厳しいです。教師に焦点を当てるより、まず「問題解決型ケース会議」をしてみると関わりの整理と支援介入が決まって担任が職場で支えられている実感を得るようです。会議の積み重ねで教師相互にストレンクス（力を得る）効果が現れ、子どもにとって良い方向に向かうことがあつたりします。

「暴力行為」「いじめ」「不登校」「中途退学」「自殺」について、神奈川県では、毎年度「神奈川県児童生徒問題行動調査」があり、調査分析報告は、現代の児童生徒を知る上で貴重な情報です。県教委のHPでぜひ

チェックしてみてください。2015年度報告では、前年度2,179件だった小学校の暴力行為発生件数が1,134件増加し3,313件となり、中学校の3,598件に近づく結果となっています。また、15年3月に川崎市で発生した中学1年生殺人事件を未然に防ぐことができなかつたのかという観点から、文科省は、学校と警察の連携状況を把握し、改善策を検討することを目的とした「学校と警察の連携に係る緊急調査」を実施し、調査結果をまとめ公表しました。

重大な事件があると、法律や体制が見直され調査開始となることにお気づきでしょうか。現在SNS（会員制情報交流サイト）に関連した問題は複雑化し、「虐待」の児童相談所対応件数は増加を続けています。児童生徒の支援では益々専門性の確保が必要となってきました。SSWer教育課程も41校と増加傾向にあります。常勤雇用はわずかであり、学生の生活設計において不安材料のひとつとなっています。しかも、アウェイ感ある教育現場に配置され、情報収集や教員組織との連携を行っていく業務は、社会福祉の専門知識だけでは成立しない厳しさもあります。

一部の教職員間では、学校を「公的ブラック組織」と自虐的に表現することがあります。新任教員の残業時間が月に平均90時間という報告があり、一方で、精神的不調で休職中のベテラン教師は早期の復職を望んでいます。

SSW活動が、児童・生徒の成長の場である教育現場の支援にも直結する手ごたえを感じています。今後も、児童生徒、学校、家庭を含めた地域社会全体の成長に寄与したいと考えています。ご協力よろしくお願い致します。

入力チームの活躍紹介

～株式会社ジューテック特販営業部での雇用事例～

はじめに

2017年1月20日、株式会社ジューテックを訪問しました。ジューテックは東京都港区にある住宅資材販売事業を中心とした、住宅産業における総合流通企業です。YMSNは、障がい者雇用を通して、08年から現在までお付き合いさせていただいています。これまでに、11人がお世話になり、現在は5人が勤務させていただいています。退職した6人は、それぞれ次のステップへと意思をもって巣立ったわけですが、在職中は良い環境を与えられ、資格を取得するなど積極的に育てていただける環境で働くことができました。

入力チーム（それぞれの声）

現在5人が勤務しているわけですが、総務部で勤務している1人を除く4人が特販営業部の特販第一営業所業務課に所属しています。今回、その4人に話を聞くことができましたのでご紹介します。

まず、入力チームの仕事について佐々木学さんに紹介していただきました。佐々木さんは、13年12月入社で、勤続3年。このチームでは一番のベテランになります。

入力チームの仕事は、所内の業務担当者から依頼を受けた書類(1軒の住宅に必要な建材などについて記されている)を基に、パソコンのシステムに入力していく作業です。

佐々木さんの業務は、入力の依頼を受け、入力用の書類を取りまとめ、チーム内に振り分けること。チームのメンバーの個性に応じて書類を選択し、依頼するのでチーム内の把握が必要とされ、やりがいも感じるとのことです。

また、日常業務の9割を占めるのが、玄関周りの受発注業務で、業者さんとのファクスを使った連絡や営業さんとの連絡などを行っているとのこと。「座っているだけでなく、所内を動くことも多く、好きな業



↑ 佐々木さん

務です。ただ、入力作業も好きな業務なので、あまりチャンスがないのが残念です」と話してくれました。

昨年10月に結婚もされ、公私ともに充実している感じがするのですが—と私が訊ねると、「仕事へのモチベーションが上がったのは確かです。共働きなので、お互いに家事をサポートし合いながらやっています。土日は家事に追われることもあります。外食したりしながら負担を少なくする工夫もしています。やっと慣れてきた頃かな…」と仕事と家庭生活の両立についても話してくれました。

この会社に入社して学んだこととして、「仕事をやることは大事だけれど、追い詰められるほどやる必要はないと思います。自分が出来なくても回るようになっていたことが分かりました」と語ってくれました。また、「所長が自分たちのことをよく理解してくれ、頻りに声掛けしてくれることがとてもありがたく、安心していられます」と締めくくられました。

ジューテックは、創立93年の歴史ある企業です。筆者の印象として、障がいのあるなしに関わらず、人を育てることに優れた企業だと感じています。それは、これまでお世話になってきた11人の障がいのある方とのお付き合いを通して感じていることです。そういう中で、新卒のまだ企業就労を体験していない方も紹介させてもらっています。その一人が新卒で当法人の職業訓練を受講し、入社2年が経過したYHさん



入力チーム



です。入力グループ唯一の女子社員です。取材に伺った当日、差し入れのお菓子を渡すと、佐々木さんから「Ｙさんに昼休み分けてもらおう！ 上手に分けてくれるんですよ」と言われていました。

そんなＹさんに２年間、勤務し続けていることについて質問すると「最初は入力することで精一杯。入力する度にこれで合っているのか、間違っていたらどうしよう、など不安でいっぱいだったのですが、少しずつ慣れ、確認方法もポストイット（付せん）を使うことなど工夫もできるようになりました。そうやり続けていたら、今は担当の仕事ができて、責任感が出てきました。担当の仕事があるので、毎日のモチベーションになっています」と教えてくれました。また、「将来は、実家から出て、自立していきたいなあ…」と夢を話してくれました。

矢野暁(さとる)さんは、ＹＭＳＮのプレジオブスクール第１期卒業生です。プレジオブスクール卒業後の進路選択時に企業体験の一つとして、ジューテックさんにお世話になりました。矢野さんは、別の職種を目指すことも考えていましたが、企業での体験を通して、目指す将来を夢としてではなく、現実化して検討した結果、入社させてもらうことを選択しました。そんな経過を知っての訪問でしたので、久しぶりに会う矢野さんは、ずいぶん落ち着いて、堂々としている印象でした。もうすぐ勤続１年になる矢野さんは、「慣れてきました。書類のパターンを覚えたので、入力がスムーズにできるようになりました。今では、難しい込み入った書類を何件も１日でこなせるようになり、スピードが上がったのが分かります」。将来について聞くと、「まだ入社１年なので今は精一杯毎日をこなすことです」と力強く話していました。

また、「今まで仕事に慣れることで必死だったり、忙しい業務に余裕がなかったりしたのですが、先月半日有休休暇を使って、プレジオブのフォローアップクラスに参加できたのは、とても楽しかった」と話してくれました。

最後に４人目の新人をご紹介します。現在プレジオブスクール２期生として在籍中の中島祥さんは、１２月の企業体験で２週間研修を積んだ後、会社から４月雇用の内定をいただきました。また、仕事に慣れるためにもプレジオブに通いながら、週何日かアルバイトをしてみないかとの提案を受け、１月中旬から週２日のアルバイトをし始めました。取材に伺った日は、アルバイト２日目。中島さんは、「まだ慣れるのに精一杯です。一生懸命頑張ります」と話しています。そばで先輩たちが、「入力は速くて正確！！ 安心していいよ」「みんなやさしいから心配なくていいよ」など温かい声掛けをしていたのが印象的でした。

職業訓練（トライ）やプレジオブスクールの参加者が就労を目標にしているときに、企業体験、企業実習はとても重要な機会です。人事部で研修担当の後藤愛優美さんは、「事前に研修にいらっしゃった方が雇用につながることは、とてもうれしいことです。また、現在勤務されている５人は現場責任者からも良い評価をもらっているのだから、安心していきます」。障がい者手帳を持っている方の雇用については、「実習＝研修の制度があることがポイントですね」と話されています。

最後に

今回、取材という形で現場に入らせていただき、声を聞くことができました。入力チームの取りまとめをトライの卒業生がやっているところ、入力チームの業務遂行があつて、営業所内の仕事が回っているところを目の当たりにでき、それぞれが社員として責任を持って仕事に取り組んでいることが確認できました。それは、会社が単に雇用義務だけで雇い入れをしているのではなく、障がいのあるなしにかかわらず個人の成長に目を向ける社風があるからこそ、働く彼らがそれに応える形が作りだされ、充実して勤務しているのだと感じました。（ＹＭＳＮ 鈴木弘美）

日々の支援のなかで

～東日本大震災から7年目に向けて～

みやぎ心のケアセンター気仙沼地域センター 片柳光昭

◇間もなく3月11日

先日、住民さんと訪問日を相談している際に、その住民さんがため息とともにつぶやいた。「もうちょっとで3月か」今年の3月11日で、東日本大震災の発災から丸6年が過ぎようとしている。その言葉には少なくとも二つの意味があったように思う。「また3月が来るのか」と、「前回から、もう1年が過ぎるのか」と。年が明けたこの時期から、少しずつ3月11日に向けた準備を始めているようにも聞こえた。

以前、書かせていただいた記事の中で「被災地に住んでいると、震災は思い出すものではなく、常にここにあるものだと感じる」と述べた。そのことは現在も変わりなく、気仙沼市から南三陸町をつなぐ国道45号線では、目を向ければそこかしこで震災の生々しさに触れることになる。折れ曲がったガードレールや歩道の手すり、震災を機に廃線となったむき出しの線路や高架橋など。身近なところでは、当職が借りているアパートも2階部分まで津波をかぶったため、外壁の一部が修繕されている。毎朝、微妙に色の違う外壁のタイルを見ると、ほんの一瞬、震災に意識が奪われる。目に映る被災した日常の風景が、6年前の3月11日から始まっていることを否が応でも思い起こさせられるのは、この時期特有のことかもしれない。

◇11月22日の地震から

①伝える大切さと、伝えられることによる影響の大きさ

震災は常にここにあるという認識を改めて感じる出来事があった。2016年11月22日に福島県沖を震源としたマグニチュード7.4の地震の発生である。この地震は、当日午前6時ごろに発生した。同時刻、スマートフォンの緊急地震速報で目覚め、ほどなくして大きな揺れに襲われた。気象庁の発表では気仙



現在の気仙沼

沼市は震度3だったが、体感はそれを上回っていた。けたたましいサイレンが気仙沼市全域で鳴り始めた。その時、慌ててつけたテレビからは予想もしない言葉が流れてきた。

「東日本大震災を思い出してください」

この言葉に強い衝撃を受けた。それだけ深刻な事態になっていると強く訴えたいのだろう、懸命に伝えてくれているのだ、と頭では理解できた。しかし、気持ちがついて行かなかった。繰り返されるテレビからの呼び掛けに対して、不意に2011年3月11日、横浜で震災を経験したことが一瞬にして頭に浮かび、あの時感じた何とも言えない不気味な感情が生々しくよみがえった。当職ですらそのような感覚に襲われたことを考えると、被災地で大きな被害を受けた住民の方々は、そのテレビからの呼び掛けをどのように聞いていたのだろうか。テレビだけではない。その日、サイレンは市内全域で夕方まで鳴り続いた。この日の出来事は、発生した災害の深刻さを伝えることの大切さと、伝えられることによる影響の大きさという難しさについて、改めて考えさせられた。

②教訓を作り、生かす



工事中の堤防

この日の地震では、別の出来事も生まれていた。この地震による津波警報で避難行動を取った住民と、そうしなかった住民がおり、対応が分かれたことが後に明らかになっている（17年1月8日付「三陸新報」より）。津波に関しては、地震発生直後に津波注意報が発表されたのだが、約2時間後の午前8時すぎに津波警報に切り替わった。三陸新報によると、市危機管理課が沿岸部（東日本大震災時の浸水区域）の127自治会を対象に行った避難状況アンケート（解答98自治会）によると「避難した」が41%、「避難しな

かった」が59%であった。避難しなかった理由では、高台への移転などで「安全な場所にいた」が76%と多くを占めたが、記事には、「津波は小さいのに騒ぎ過ぎだったのでは」という30代の男性会社員の声も掲載されている。実際には、津波警報で予測されていた高さの津波は到達することがなかったことも、この声に影響しているように思う。発生や被害の予測が極めて困難な災害に対して、自分の身を守る行動として何をすべきなのか、東日本大震災での経験とその教訓を生かし続けることの困難さも垣間見たように感じた。

復興道半ばの被災地が新たな災害に向き合う際、どのような問題や課題が生まれるのか、11月22日の地震では、そのいくつかが明らかになったように思う。今回、明らかになった問題や課題を解決し、これを新たな教訓として、次に発生するであろう災害時に活かせるよう取り組むことが求められている。

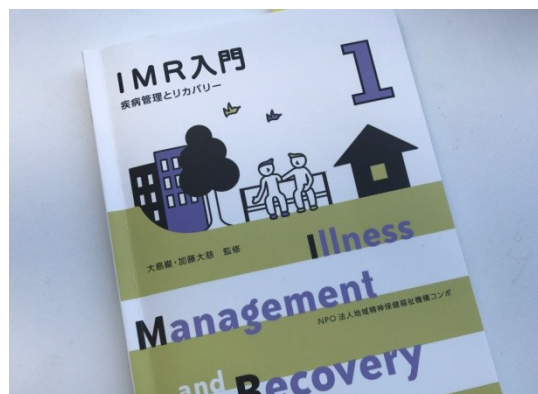
トライ/ジョブコーチ/OB

トライとジョブコーチ支援を通して知り合った方々と、さまざまなグループを作ってきました。その中で今回は、「勉強会」グループを紹介します。

このグループは、『IMR（疾病管理とリカバリー）』のことを知りたいね」ということでスタートしました。毎月1回、参加者は私を含めて4人、“IMR入門1”（＝大島巖・加藤大慈監修・コンポ）を読んでいます。目標は1年かけて読み終わることとしています。参加者全員、フルタイムの仕事をしているので集まるのは週末。仕事のあれこれもさることながら、すぐに読書会が始まります。私にとっては、病気を経験している彼らとの勉強では、テキストだけでは理解できなかった読み解きができ、良い時間になっています。

実は、このメンバーでトライの講義を1セッション（自己管理③ストレス処理について）担当しています。これから就職を目指す人にとって、期待と不安が混在しているときに、先輩からの授業を受けられることは、良い刺激になっていると感じます。

今後、この「勉強会」で、また新たな学びを続けていきます。



中高生の放課後支援 Irodori



新しい仲間



- ・12月から新しい仲間が加わりました。見学に来てくれた日は、わくわくした気分で新しい仲間を迎えました。中学生の女子2人、また女子度が高くなりましたが、にぎやかなIrodoriになっています。

新メンバー募集中

- ・楽しいIrodoriに来て、学校での疲れや不安、心配事を癒やしてください。元気になれるところです。

クリスマス会



- ・12月22日にクリスマス会を開催しました。みんなで相談して考えたプログラムは、自己紹介から出し物、プレゼント交換ビンゴ とどれも楽しい企画でした。ゲストの保護者やボランティアの皆さんもとても楽しんでくれました。

- ・ごちそうは、手作りケーキとクラムチャウダー、買った唐揚げに差し入れのクッキーなど食べきれないごちそうでした。OBも参加してくれたので、久しぶりに会えてとても嬉しい一日になりました。



ホームベーカリー



- ・先日、ホームベーカリーを買いました。早速その日にパンを焼きました。焼きたてのパンはとてもおいしかったです。みんな「おいしい」を連呼しながら楽しくいただきました。

- ・レシピ本をみるとパンだけでなく、ケーキやピザも作れるので、おやつ作りの幅が広がったとみんな大満足でした。



かながわプレジヨブスクール

「かながわプレジヨブスクール」次年度生徒募集！！

- 3月25日(土)：10時30分～11時30分 会場：メンタルネット事務所
- ※ 説明会は4月以降も随時実施していきます。最新の日程はホームページでご確認ください

横浜校

通年で取り組んでいる「1分間スピーチ」について紹介します。

6月から毎朝「最近あったよかったこと、こんなことをした！」をテーマに当番で順にスピーチをしています。その時々目標を設定してきました。最初は「とにかく人前で話せばOK」からスタートし、次は「聞いている人が1人ずつ話をしっかり聞いて、質問もしくは感想を伝える」。夏過ぎには「はじめ・なか・おわりを意識して事前に話す内容を考える」。そして冬には「聞いている人の質問、感想のやり取りを2往復以上する」としています。

開始当初は「～に行きました。疲れました。」といった内容が多かったのですが、最近では「いここに料理を作ったらたくさん食べてくれて、その量から彼らの成長を感じ嬉しかったです。」といった出来事から自分の気持ちを伝えるコメントが聞かれるようになりました。感想・質問のやりとりでは、次に質問しやすいように答える側が長めに話すようになってきています。

皆さんの意外な一面、大切な一場面を知ることができ、それに加えて日々の積み重ねを実感できる楽しい時間です。

(YMSN 金山正恵)

上大岡校

12月のクリスマス会での様子をご紹介します。グループに分かれて、ビーフシチューとケーキを作りました。ビーフシチューグループは、お肉や野菜などを同じ大きさに揃えて切ることに挑戦し、話し合いながら作っていました。とても上手においしくできました。ケーキグループは、スポンジの間にスライスした焼きリンゴを挟み、クッキーにチョコペンで雪だるまや星を描いて、1人1人違うデコレーションをしていました。とても可愛くて、「食べるのがもったいない」とみんなで言いつつ、おいしく食べました。その後で行った体を使うゲーム「ツイスター」は、みんな顔を真っ赤にして、白熱していました。終わった頃には、「もう動けない…やりきった!」、「つらかったけど、いい思い出になった」と言っていました。

(YMSN 渡部恵梨子)



定例研修会

・精神保健福祉研修会

- ・日程 毎月 第2金曜日(全10回)
- ・時間 pm. 7:00~8:30(5月はお休み)
- ・場所 YMSN研修室 (上大岡駅 徒歩5分)
- ・内容 最近注目の技法を学ぼう
- ・ホームページをご覧ください <http://forest-1.com/ymsn/>

当事者のためのグループ活動

・就労フォローアップミーティング

- ・年1回、OB会の開催

・就労者SST

- ・日程 毎月 第1土金曜日(全10回) 時間 pm. 1:00~2:30
- ・場所 YMSN研修室

・当事者グループ活動

- ・めんちゃれ 他 場所 YMSN研修室

支援者のためのスキルアップ研修会

- ・ホームページをご覧ください <http://forest-1.com/ymsn/>

・SSTにおける処理技能への介入 講師:小山徹平(sst普及協会認定講師)

- ・日程 3/19(日) 10:00~16:00
- ・場所 ウィリング横浜5階503研修室 (上大岡駅 徒歩5分)

正会員：5,000円(個人) 賛助会員：12,000円(団体)

(正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付)

振込先：郵便振替口座 00250-6-71607

横浜メンタルサービスネットワーク

会費を銀行・コンビニ ATM やネットから振り込む場合の入力方法をご案内します。

振り込み料は432円かかりますが、郵便局に行かなくても良いので楽は楽です。

(金融機関名) ゆうちょ銀行 (店名) Oニ九

(種別) 当座 (口座番号) 71607

(名義) ヨコハマメンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol. 13 No. 3

YMSN 第51号 2017年2月10日発行

年間購読料1,000円(年4回発行) 1冊頒価300円

発行：NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク

理事長 鈴木弘美 編集代表 森川充子

〒233-0002 横浜市港南区上大岡西 1-12-3-204

TEL 045-841-2179

FAX 045-841-2189

<http://forest-1.com/ymsn/>

e-mail : ymsn@forest-1.com